キラリ輝く 地域あんてな

県民活動推進委員

開村修三 周南市

周南市徳山にある「万葉の森」は、市のほぼ中央に位置し、珍しい木々に満ちています。かつては京都大学の演習林（林学の研究や教育のための林）であったために、台湾由来のものや大賀ハスもあり、まさに宝の森です。

月1回、県内各地の障害者とボランティアがここで散策し、鳥の声を聴きながら自然とのふれあいを楽しまれています。障害者やボランティアの交流は、県内だけに留まらず、秋には福島県会津で交流登山大会が実施される予定です。

これからも、地元自治会や活動団体とのさらなる連携・協力を得ながら活動を継続していきたいと思います。

県民活動推進委員

秋本和美 山陽小野田市

山陽小野田市は、昔からボランティアの盛んな地域です。

例えば、市や社協の広報紙を音訳して、視覚障がい者へ届ける活動を主としている「おとづれの会」は、施設を訪問し、寸劇・紙芝居を開催するなど幅広いボランティア活動を32年間楽しんでいるグループです。

そんな活動盛んな同市では、介護予防の目的で平成21年から「いきいき介護サポーター事業」を始めました。登録サポーターがボランティアをすると、手帳にスタンプを押してもらい、その数に応じた活動助成金（上限あり）をもらうシステムです。登録サポーターは1年目が74人、5年目の昨年度末は144人に増えました。今年度から年齢枠が25歳広がったので、サポーター数の発表が楽しみです。

Column

パートナー リレーコラム

文 企画運営委員 原田 浩

結婚して39年、パートナーとして、お互いにどう呼んでいただろうと振り返ってみると、結婚当初は、「ひろしさん」と呼ばれ、自分は呼んでいなかった様な気がします。

子どもが1歳になる頃から、お互いに「おかあさん」「おとうさん」と呼んでいたが、月日が経つにつれ、「お～い」「よ～い」と呼び、外では、「うちの女房は…」で通していました。

女房は家の中では、「おとうさん」と呼び、玄関先の対応や会社などからの電話では、現在でも「うちの主人は…」と呼んでいますが、近所の人達、外での会話等では、「うちの旦那は…」と使い分けをしています。

子ども達も成長し、孫ができて、家に遊びに来ると、孫が「ジィジ」「パァパ」と呼び、私達も自然に「ジィジ」「パァパ」と呼び合い、孫が帰っていなくなると、お互い暗黙の了解みたいな感じで呼ばなくなります。

円満な家庭生活を送っている間に、いろいろと呼び方を変えていくもんだなと楽しく思っています。

文 企画運営委員 堀江 新子

結婚前から夫のことを「～さん」と呼び、夫は私の名前（ワカコ）を縮めて、「ワコ」呼んでいたので、今年結婚40年になるがそのまま続いている。最近では長男も「ワカコさん」と呼ぶ。ようやく長男も自立してきて親とも大人同士として話せるようになったのかなと子どもの成長を感じている。子ども達のパートナーの両親ともお互いに「～さん」と呼んでいるので、親戚というよりは友達が増えたような感覚で交流している。

連続テレビ小説「花子とアン」で主人公の花子は、自分を"はな"ではなく「花子」と呼んで欲しいとこだわり、原作のアンも"E"のついた「アン」と呼んで名前にこだわっている。中学生の英語の時間では「世界に一人しかいない私だから、名前は大文字で始めようね」と授業していた。大文字にすると名前が一気に輝いてくるようだ。男性も女性も自分の名前に誇りを持って生きられる環境が、いつでも、何処でも実現する社会であってほしい。